放課後児童クラブに勤務して思うこと

青柳勇治

はじめに

昨年、『教育情報』誌十二月号で「暫定再任用の日々」と題して、「このすばらしい教職を今しばらく続けたい。」と書いた。その原稿を提出し終えた頃、家族の介護が大変になり、それに伴い納得のいく教育実践ができなくなってきたことを理由に、校長に退職を申し出た。今から思えば、介護離職を避けるために、具体的に仕事の軽減を図ってもらえばよかったと思うが、その時は苦しさから逃れたい、職場に迷惑を掛けられないという思いが強かった。その後、家族の状況は少し安定したので、「やめなくてもよかったのでは？」という思いが、時々頭をよぎった。そんな思いを引きずって三十八年間の教員人生に終止符を打った。

児童クラブ支援員になろうと思ったきっかけ

四月一日の朝、どんな思いで迎えるのかと思ったが、いつもと変わらず介護で始まった。それでも夜の介護まで自由に過ごせるようになった。時間のゆとりができて好きなことをする時間も増えたが、一か月もすると、無職でいることや人との関わりが減ったことで、張り合いを失っていった。何より無収入だったので不安が増していった。

そこで五月半ば頃から就活を始めた。ネットで調べてみると、放課後児童クラブ支援員募集という広告が目に入った。午後から半日勤務ということ、また、児童クラブの様子を教員という立場で見てきたことで、興味をもち応募した。

放課後児童クラブとは

放課後児童クラブは放課後児童健全育成事

業として、児童福祉法に基づき「小学校に就学している児童であって、その保護者が労働等により昼間家庭にいないものに、授業の終了後に児童厚生施設等の施設を利用して適切な遊び及び生活の場を与えて、その健全な育成を図る事業」と規定されている。

夕方、仕事を終えた保護者に子どもを引き渡す時、親子のほっとした表情が何とも言えない。支援員の仕事が子どもの笑顔と安全安心だけでなく、保護者の就労を支えているのだと実感される。

長岡市の放課後児童クラブ

令和七年度から長岡市内の全ての児童クラブが、市から民間企業「安全給食サービスと明日葉（あしたば）の共同企業体」へ事業委託された。安全給食サービス（以下：本社）は、東京の放課後児童クラブ等運営会社の「明日葉」と提携し、そのノウハウをもとに運営していくことになった。市としては子ども政策課が責任をもって関わっている。利用料は無料。職員は、継続雇用されている。

寺泊児童クラブについて

寺泊児童クラブは、一年生教室脇の空き教室を利用している。体育館も利用できるが、職員室前の廊下を三十メートルほど歩かなければならず利用しにくい。人数は一年生が三人。二年生が十八人、三年生が四人、合計二十五人で、平日の利用はだいたい二十名前後である。特別な配慮の必要な子もいる。全体的に人なつこくて元気がよい。

開設時間は、児童の下校から十八時までで、十九時まで延長して預かることもできる。ただし延長料金が発生する。十八時以降残る子は一、二名で、十八時三十分にはほぼ全員引き渡すことができる。土曜日は朝から開設している。

職員配置は四人で、特別な配慮の必要の子がいるため一名加配になっている。基準では、資格をもつ支援員と資格のない補助員の二人で四十人を受け入れることが可能であるが、

施設の規模の関係で定員は二十名となっている。基準からすると、職員の配置は充実しているが、私以外の十一名はパートである。

児童クラブ主任に立候補

六月末から仕事を始め、七、八月と夏休み期間の仕事をした。教員時代は少しゆとりのある期間だったが、児童クラブは最も大変な期間で、お盆もカレンダー通りの勤務であった。

児童クラブには通常、主になってクラブを取り仕切る主任がいるが。寺泊児童クラブでは、主任が決まっていなかった。仕切る人がいないので、職員間の仕事分担や情報共有がうまくいかず、不満が出ていた。とても残念に思った私は、経験は浅かったが主任に立候補し承認された。職員は私の地元ということもあり、同窓生や顔見知りがいて、私が主任になることを支持してくれた。

勤務時間は一日五・五時間で月に二十日以上勤務しなければならない。十三時出勤で十八時三十分退勤である。毎日出勤することで、生活リズムもでき、子ども・職員との関わりで張り合いも生まれた。待遇はパートから嘱託社員となり、収入も安定し社会保険にも加入できた。

主任になって何よりよいのは、自分の方針で児童クラブを運営できることである。もちろん他の職員の意見を聞きつつであるが、合意を得ながら改善を図ることができた。改善点は以下の通りである。

・座席ごとに班を作り、班長を決めて行動するようにした。入室後、全員を整列させ手洗い・うがいに行き、その後、席に着いて学習をするという流れが、非常に騒がしく苦労していた。そこを班ごとに行動することで、職員に言われて動くのではなく、班長の指示でスムーズに動けるようになった。各班に一人の職員を付けて、担当班を中心に見守ってもらった。今までは、子どもに呼ばれるままに、あちこちの席に移動していたが、じっくりと自分の担当児童を見ることができるようになった。

・「見える化・共有化」の推進。体育館遊びの

後、片付けや窓の締め忘れなどで学校側から指摘を受けることがあった。そこで、「体育館使用時のチェック表」を作り、見落としのないようにした。

また、子どもたちへの指導事項、きまりの変更、本社からの指示などを、「情報共有」ファイルにまとめた。そこに職員チェック表を付けてチェックしてもらい、「見た・見てない。聞いた・聞いてない。」のトラブルの回避に努め、情報共有を進めた。

・職員のグループラインを作った。これまでは出勤日が様々なので、連絡事項を伝えるのが困難であったが、スムーズになった。職員からの質問にも、すぐに対応できるようになった。

終わりに

放課後児童クラブの民間委託によって、長岡市全体の児童クラブが一律の基準で運営されようとしている。そのメリット・デメリットは今後現れてくると思われる。本社に若い人材を集め、ＩＣＴ化を進めている。現場には、スマホとパソコンが一台ずつ配付されていて、本社から次々とラインで指示が来る。指示に対してラインやコンピュータで取組や回答をしている。主任になってから、提出物や職場でのコンピュータ操作に追われ、子どもと関わる時間が減った。職員の年齢層は高くスマホやパソコン操作に不慣れな職員も多い。十一月半ば現在では、各自がスマホで年末調整をしなければならず、四苦八苦している。

「スマホやパソコンが難しくてついていけない。」と仕事への自信を無くしてしまう職員もいるが、励まし合ってメインの見守りを行っている。

今回は、子どもたちの活動の様子や課題などは報告できなかった。まだ、経験も浅いのでよく知らないことが多い。民間委託になって、研修の充実や他施設の交流もある。さらに放課後児童クラブの実践を積み重ねていきたい。

（あおやぎ　ゆうじ　長岡市）